



天井がドシンと鳴った。

ベッドに寝転がって本を読んでいた奈緒は、天井を睨みつけた。まただ。4月になってから、2階の住人がやたら物音をたてるようになっていた。

築20年ほどの古い木造アパートなのでちょっと室内を歩いただけでも足音が降ってくるのはしかたのないことだとわかっているが、それにしてもあの音はちょっと大きすぎる。何か大きなものを落としたりとか、部屋で柔道の受け身の練習をしているとか、そんなことを想像させる物音である。

また、ドシン、と音がした。あまりの振動に天井からぱらぱらと何か落ちて来る。

(うるさいなあ。ほんとになにやってるんだろう)

本を置き、ベッドの上に身を起こした。黒く変色した天井板を見つめる。見つめたところで何も事態は変化しないのだが、(うるさいよ)と視線に力をこめてみた。

ドシン。

奈緒の視線をはねかえすようにまた天井が鳴った。

「文句を言いに行っただ方がいいかなあ」

奈緒はため息をついた。

奈緒が住む朝日荘は、玄関で靴を脱いであがると廊下の両側に4つずつ部屋があるというタイプのアパートである。廊下は歩くとみしみしと音を立てた。部屋の入口はささくれた木の引き戸、鍵は南京錠である。風呂とトイレは共同だった。しかしその分圧倒的に家賃が安い。奈緒が古くても我慢しているのはひとえにそのためだった。大学から少し離れたところにあったせいか住人は学生ばかりではないようだったが、何人かは同じ大学の学生が住んでいる、と大家は言っていた。

「お2階さんは、学生だったかなあ」

学生ならいいが、もしちょっとこわもてのおじさんだったら、うかつに文句など言わない方がいいかもしれない。

「大家さんに言ってみようかな」

直接言ってトラブルになるよりは、その方がいい。そう結論を出して奈緒は本の続きを読みだした。

次の日にでも大家さんのところへ行くつもりだったのだが、講義に出たりアルバイトがあったりで時間が取れず、そのままになっていた。天井がしばらく鳴りをひそめていた、ということもあった。なんだ、これならわざわざことを荒立てなくてもいいやと思い、2階の住人のことはすっかり忘れてしまっていた。

ゴールデンウィークにゼミの仲間と旅行へ行き、人ゴミと渋滞にうんざりさせられながらも楽しんで帰ってきた夜のことだった。

荷物を片づけ、買ってきたお土産を仕分けしている時に、ふいに天井がドンドンドンドンと大

きな音を立てた。ついで、ドシンバタンと立ち続けに何かは暴れているような音がする。

その音に混じってわーわーというぐもった男の声が聞こえてきた。木枠の窓ががたがたとゆれる。奈緒は恐ろしさに手を止め、天井を見上げた。何だろう。いつもと違う。いつもは一人で暴れているような感じなのだが、今夜はどうも様子が違う。奈緒は全神経を天井に集中した。

……うあんだか……なんだよ！

そんな叫び声が聞こえてきた。そのあとに、ぼそぼそした声が聞こえる。なだめているのか、説得しているのか。そしてしばらくの静寂。

よかった、このままおさまるのか、とほっとしかけた瞬間、またしても大きな音がした。こもった声が振動に絡まって、まるでまがまがしい獣のようだ。

ついに奈緒は我慢しきれなくなって立ち上がった。とにかく一言でも文句を言ってやらなければ気が済まない。階下に人が住んでいるということを忘れていた。こんな古いアパートで暴れたら迷惑だということがわからないのだろうか。

心臓が痛いくらいドキドキしていた。胃のあたりに熱い塊がとぐろを巻いている。煮えたぎったマグマのようだ。怒りと怖さで足ががくがくする。掌にはじっとりと汗をかき始めていた。引き戸に手をかける。腕には鳥肌がたっていた。生唾がわいてきて、何度も飲み込んだ。

廊下に出ると、あの騒ぎがうそのようにしんと静まり返っていた。一瞬、あれは自分の錯覚だったかと不安になった。しかしよく耳を澄ませてみると階段の上の方でなにやら物音がしている。

薄ぼんやりとした裸電球が照らし出すすり減った廊下を、奈緒は恐る恐る進んだ。ぎしぎしといやな音がする。怒りが小さくなって、だんだん恐れの方が強くなってくる。階段の下で一度足を止め、2階の様子をうかがった。少しためらったあと、階段に足をかけ、そろりそろりと上って行った。

2階の住人はほとんど出かけているのか、在室している気配がない。奈緒の部屋の真上にあたる部屋の戸はほんの少し隙間があいており、細い光が廊下に線を引いていた。そこから声が漏れてきている。

「……な、そうだろ？」 「いや、でも……」

何か言いあいでもしているのだろうか。もしそうなら、そんなところへのこのこ文句なんか言いに行って却って火に油を注ぐというようなことにならないだろうか。奈緒は引き返そうかどうしようか迷った。

(でも。うるさいし。ちょっとくらい文句言ってもいいと思う)

力の入らない足を無理やり前に押し出して、問題の部屋の前まで進む。一度深呼吸をしてから戸を叩いた。しかし、話し声にまぎれてしまったらしく返事がない。仕方なくもう一度叩く。

「……はい？」

いぶかしげな声がした。

「あの。下の部屋のもんですけど」

「なんですか?!」

逆切れしたような声で言われて、頭にカッと血が上った。

「なんですかって、あの、うるさいんですけど。ドスドスするのやめてもらえませんか」

「はあ？ 関係ないだろう。今忙しいんだよ。帰ってくれ」

ナニイッテンダ、コイツ？ 思いがけない言われように、奈緒は思わず後ずさった。

(まともじゃないのかもしれない)

ひゅっと恐怖が心をよぎる。

奈緒が黙ったことで話は済んだと思ったのか、部屋の中ではまた続きが始まろうとしていた。そうはさせじと奈緒は再び戸を叩いた。「すみません。ちょっと。すみません」

「うるせー！！」

部屋の中から絶叫がかえってきた。

奈緒はふだん滅多に腹を立てたり大声を出したりすることはない。争い事は嫌だし、なるべく波風を立てずに穏便に過ごしたいほうだ。しかし、ふとしたはずみにネジが飛び、人が変わったように怒りだすことがある。このときもそうだった。理不尽な言われように、ビンと音をたててネジが飛んだ。

「なに言ってるのよ！ うるさいのはそっちでしょ！ こんな古いアパートで、夜中にどたばた騒ぐなんて非常識じゃないの！ 静かにしてって言ってるのに、うるせーとは何よ！！」

我を忘れて大声で怒鳴ってしまった。いったんはひっこんだマグマが改めて噴出してきたようだった。もう一言言ってやろうと息を吸い込んだ時、目の前のささくれた戸がふいに開いた。虚を突かれた奈緒は殴られるかと思って身構えた。

ところが、

「あー、申し訳ない」

出てきて頭を下げたのは、若い男だった。

「えーと、下の部屋の人？」

そう言ってまるで黒豆のような目で奈緒を見る。Tシャツの衿元がびろびろに伸びていた。

「そう、ですけど」

「すみませんね。あいつ、ちょっと悩み事があるってね。今、俺が相談に乗ってやってたんだけど、なんか混乱したみたいで」

男は低い声でぼそぼそと説明した。

どうやら暴れていたのはこの男ではないらしい。奈緒は気を取り直して、さらに言い募った。「悩みがあるかどうか知りませんが、だからって騒いでいいわけないでしょう。それに相談に乗るならもっと静かにやってくださいよ」

「いや、ほんと、すみません」

黒豆くんはひたすら頭を下げた。彼の肩越しに部屋の様子がちらっと見えた。衣類や毛布、雑誌やお菓子の袋などが散乱している。部屋の住人はどこにいるのか、と視線を動かしたその時に、ぬっと黒豆くんの後ろに人が立った。

奈緒はビクツとした。その男はぼさぼさの髪をして顔色が悪く、どろんとした目つきをしていたからだ。ほほに赤い筋が見えるような気がするが、もしやあれは血の跡なのか？ いやだ、も

う部屋に帰りたい。今すぐ回れ右したかった。

「先輩が謝ることないですよ」 そいつがもごもごと言った。「暴れたのはオレだし」

彼がこの部屋の住人らしい。今まで一度も見かけたことがなかった。学生なのだろうか。いや、この際そんなことはどうでもいい。奈緒は勇気を振り絞って彼に言った。

「あの、ここは古いアパートですし、物音が響くんです。夜は静かにしてもらえませんか」

「はあ、すみません」

ぼさ男は気のない声で言った。その言い方にカチンときたものの、もはや奈緒はどうでもよくなっていた。はあ、と聞えよがしに一つため息をついて「お願いしますね」とだけ言い、部屋に戻ろうとした。

その時ふいに黒豆くんが口を開いた。

「あなた、学生ですか？」

「そう、ですけど」

警戒しながらそう答えると、黒豆くんは「同じ大学かな」と続けた。どう答えようか迷っていると、さらに続けて黒豆くんは言った。「悩み、とかないですか？」

突然何を言い出すのだろう。なぜそんなことを答えなければならないのだ。奈緒はそう思ったものの、つい返事をしてしまった。「そりゃ、悩みぐらいありますけど」

黒豆くんは奈緒の返事を聞いてふんと鼻先で笑った。

「まあ、若い女の子の悩みなんてたかがしれてますよね。しかしこいつは違う。人生について悩んでいるんだ。このままでいいのか、これから先どうやって生きていけばいいのかについて深く悩んでいる。それが高じてこんなふうになんて病んでしまっているんだ。うるさくしたのは申し訳なかったが、そのへんのところを思いやってほしい」

驚いたときに「ぼかんとする」という表現があるが、その時の奈緒はまさに「ぼかんと」口が開いてしまった。ずいぶん失礼かつ傲慢ないい草ではないか。

「お言葉ですけど」

奈緒は怒りを押し殺して冷静になろうと努力した。

「私のことをよく知りもしないで適当なことをいうのはやめてください。それから、悩みっていうのは人と比べるもんじゃないと思います。その人が」そう言って目だけでぼさ男の方を指した。彼はまだ黒豆くんの後ろに背後霊のように突っ立っている。「なにをどれくらい悩んでいるのかわかりませんが、でも、それってあたしには何の関係もないです。悩んでいるから暴れてもいいっていうなら、世界中みんな大暴れしちゃうじゃないですか。自分に都合のいいことばかり言わないでください」

言っているうちにまたマグマが噴出してきて、最後は切り口上になった。口元がふるふると震える。「ほんとに静かにしてくださいね」最後にもう一度念を押すと、奈緒は階段を駆け降りた。勢い余って最後の一段を飛び越してしまった。転びそうになったがなんとかこらえ、つんと顎を上げて部屋に戻った。

後ろ手で戸を閉めると、はああっと大きなため息が出た。

「言っちゃった……」

今ごろになって急に恐怖がこみあげてきた。怒りにまかせたとはいえ、ずいぶんとげとげしい言い方をしてしまったものだ。大丈夫だろうか。仕返しなんかされたりしないだろうか。奈緒は自分の部屋なのに忍び足になり、そっと天井を見上げた。かすかに話し声が聞こえるような気はするが、しばらく様子をうかがっていても暴れる気配はなかった。しかしその夜はずっと2階のことが気になって、なかなか眠れなかった。

それから2週間ほどは、なんとなくびくびくしながら過ごしていた。ミシッという音がすればはっと天井を見上げ、ドンとどこかで音がすればびくっとしてあたりを見回した。部屋を出る時も、つい周りを見渡すようにしてしまう。アパートにいるのがいやで、友達の下宿にとめてもらったりもした。

しかしゼミの研究発表があったり、サークルのイベントがあったりして忙しく過ごすうちに、だんだんと記憶が薄れて行った。あれっさり2階の住人が騒がなかったこともあり、奈緒の中ではこの事件は解決済みとなっていた。

もう夏だなあ。

青く晴れ渡った空を見上げて奈緒はそう思った。朝から太陽の光がまぶしく降り注ぎ、半袖の腕がじりじりと焼けている。梅雨明け宣言はまだ出ていないが、季節はとっくに進んでいる。

大学は夏休みに入っていたが、ゼミはあった。今日奈緒は、苦勞して書き上げたレポートを持って大学に出てきたのだ。

2階の住人はあれから本当に静かになってしまった。足音すらもめったにしなくなったので、引っ越してしまったのかと思ったくらいだ。ポストに名札があるところを見るとまだ住んでいるようだったが、とにかく奈緒は物音にびくつくこともなく、部屋でレポート作成に取り組むことができたのだった。

奈緒の通う大学は丘の斜面に建てられているので、門からはずっと上り坂が続いている。下の方には教養学部があり、専門学部は坂の上だ。奈緒の所属するゼミの部屋はいちばん上に立っている校舎の中にあつた。急いでいる時にはちょっとした山登り気分になる。夏には汗だくになってしまうので、奈緒は時間の余裕を見て部屋を出てきていた。ぶらぶらと教養学部の間を抜けて歩く。

どこからか蝉の声が聞こえてくる。

大学のまわりは自然がそのまま残されており、歩道のわきには雑草が茂っている。つやつやとした緑の葉が、白く太陽の光をはねかえしていた。

足元のコンクリートにいくつもひび割れが走っている。あたりに人の気配はなく、なんだか異次元空間に紛れ込んだようだった。

人類最後の日が真夏だったら、とぼんやり思った。しゃわしゃわと鳴く蝉の声は誰が聞くのだろう。

その時ふいに「あの」と声が聞こえた。

生き残りがいた？ 一瞬そう思いかけて苦笑した。

(いやいや、滅亡してないし)

空想から現実に戻って、声のする方へ目を向けた。そして、ぎょっとした。

さっきの空想が本当のことだったかと思ってしまうような顔がそこにあつた。

片方のまぶたが腫れ上がり目がふさがっている。目の周りにはまるでマンガのように青あざがあり、唇もひび割れて膨れている。頬には絆創膏が張られていた。頭は青々と刈り上げられているので、一言で言って大変恐ろしいご面相である。その恐ろしい顔をした男が、思いがけず優しい声で言った。

「あの、違ったらごめんなさい。磯山さん、ですよ」

どうしてこの男が私の名前を知っているのだろう。奈緒はびくびくしながら「そうですけど」と答えた。

「よかったあ」 そういって男は笑ったようだった。ようだった、というのは顔が腫れ上がっているせいで表情がよくわからないのだ。

「あの、僕、同じアパートの上の部屋のもので。岩城といいます。この間にご迷惑かけてほんとうにすいませんでした。あのときは僕もいろいろ混乱してて、暴れるつもりはなかったんですけど、気がついたらあんなふうになってて……。磯山さんに怒られて初めて気がつきました。はは、遅いですよね」

そう言って岩城と名乗る男は頭に手をやり坊主頭をつるりとなでた。

「あたしには関係ないって言われて、ちょっとショックでした。でも考えてみたらそうですもんね。ほんとすいません。それであの、これ、おわびです」

岩城が差し出したのは大学の近くにあるケーキ屋の箱だった。

「あとで部屋へ持っていくつもりだったんですよ。ここで会えるとは思わなかったな。よかったです。あの、ケーキ、好きですよ？」

「はあ、まあ」

「よかった。何がいいかわからなかったからケーキにしたんですよ。どうぞ食べてください。それと、もう部屋で騒いだりしませんから。安心してください」

差し出されたケーキの箱を受け取ろうかどうしようか迷った。やけに雄弁な岩城がちょっと不気味だったし、騒がないから安心しろと言われてもそう簡単に信用できない。

奈緒の迷いに気づいたのか、岩城はふっと小さく笑った。

「警戒されるのも無理ないですよ。でも、信じてください。僕あれから考え方を変えたんですよ。磯山さんに言われたことじっくり考えて、それでボクシングを始めたんです」

またしても意表を突く発言に、奈緒は改めて岩城の顔を見つめた。岩城は自分の顔を指差して言った。

「すごいことになってるでしょ」

「え、あ、はい」

「自分を鍛えようと思ったんです。部屋にこもってうだうだしてちゃだめだと思ひましてね。でもまだ最初なんでぼこぼこになっちゃったんです」

「ああ……そうなんですか」

私、なんて言ったんだろう。自分の言ったことなんかもう覚えていなかった。それとボクシングがどうつながるのか見当もつかなかった。

「だからもう大丈夫です。これ、受け取ってください」

岩城は奈緒の手に箱を押しつけた。

「アパートで会ったら挨拶くらいはさせてください。じゃあ、失礼します。これからボクシングの練習があるんで」

言うだけ言って岩城は奈緒に背を向けて歩きだした。

「え？ あ、あのこれ……」

あわてて岩城の後ろ姿に声をかけたが、彼は手を軽く上げただけで振り向かずに行ってしまった。

奈緒はケーキの箱を持ってぼんやり立ちつくした。

2階の住人に文句を言ったこともすでに忘れかけていた。



―――どうして私の名前を知っているの？

―――なんでこんなところで会うの？

―――ボクシングって何よ。

頭の中は疑問符だらけだった。

「ケーキ……」

ふと我に返り、箱を少し開けて中をのぞいてみた。ショートケーキがいくつか入っている。箱を揺らしたのか、生クリームが箱の内側についてしまっていた。

「今からゼミなんですけど」ともう姿の見えなくなった岩城に trying みる。「こんなとこでケーキもらってどうしろって言うの」

確かにケーキは好きだが、シチュエーションというものがあるだろう。しかし、いない人に文句を言っても仕方がないので、気を取り直してゼミ室に向かった。

箱を揺らさないように気をつけて歩きながら、岩城のことを思い出した。怒鳴りこんだ時はぼさぼさの髪をしていたような気がする。あの時のどろんとした顔と、今日の腫れてはいるがせいせいしたような顔が同じ人間とは思えなかった。

「……ボクシング、かあ」

世の中には思いがけないことをする人もいるものである。

彼の、部屋を転げ回りたくなるような悩みが、ボクシングで少しでも解消できればいいな、と思った。そういうもので解消される悩みであるなら。

アパートで会ったら挨拶くらいはしよう。同じ大学生らしいから。

それにしても、ともう一度思った。あの顔には驚いた。殴られて腫れあがっている顔なんて初めて見た。それも生で。じろじろ見て失礼だったかもしれない。でも、あまりの珍しさに目を離せなかったのだ。

ケーキはこのままゼミのみんなで食べてしまおう。そのとき、「知り合いのボクサーからもらったんだよ」と言ったらみんなは驚くだろうか。

(完)